寄稿

日本労働運動史における高野房太郎の足跡と役割
－日本労働組合運動の父－

小松　隆二
（慶應義塾大学名誉教授）

はじめに

高野房太郎は、インテリゲンチャとして、黎明期日本において労働者たちに労働組合の必要を訴え、その実践にも乗り出した。しかも結果としても、労働組合の結成や定着という成果もあげることができた。

そのように、労働組合を結成する一連の動きに日本において最初に挑戦した人が高野であった。しかも彼は、そのような労働者の組織化の実践・現場において「労働組合」という用語を最初に使用した人でもあった。

それらの点のみを見ても、高野という人は日本労働組合運動の歴史において際だって大きな足跡を標した人であった。

それでいて、その足跡の大きさに比べて、高野は地味で目立たない存在である。過激性や戦闘性とも、また社会主義とも距離を置いていた。とりわけ、近年、労働組合や労働運動に関する研究が流行遅れの領域の仲間入りをしてからは、一層片隅に追いやられ、目立たなくなっている。研究の成果や文献としても、一般の人が利用できるのは、二村一夫氏の労作『労働は神聖なり、結合は勢力なり－高野房太郎とその時代－』（岩波書店）と高野房太郎著（大島清・二村一夫編訳）『明治日本労働通信』（岩波書店）くらいのものであろう。

なお、高野は、インテリゲンチャとはいえ、アメリカでは厳しい労働・労働者の体験も持っている。またアメリカ労働総同盟との交流・見聞も積んでいる。それだけに、苦難を乗り越えて経営者になった佐久間貞一とも、またアメリカで大学も卒業し、社会主義者にもなる片山潜等とも明らかに異なる位置・役割、そして姿勢で労働組合運動に関わり、協力した。

その高野は、単に言葉や文章で労働者に団結を呼びかけるだけではなく、また労働者の組織化を外から応援するだけではなく、労働者とつながりを持ち、同じレベルに立って、労働組合とその運動の中に自らも身を投じた。その上で、労働組合の結成や活動、そして展開にまで関わることになった。驚嘆に値する足跡であり、役割であった。

また、高野は、労働者の組織化も運動の恒常化も、また地位の向上も、上から、あるいは外から指導するだけでは、実現は難しいと理解していた。労働者が自ら参加し、活動することなしには安定し、永続化する組織も運動も実現できないと考えた。そのような高野の認識や方法に沿って、計画、実践された結果、資本主義経済がまだ十分に発展していない明治期の難しい時代に、労働組合の生成と定着が短期間であれ、実現されたのである。

それだけに、労働組合とその運動の黎明期に、高野の果たした役割は傑出したものであった。彼が片山潜等をおいて「日本労働（組合）運動の父」と高く評価されるのも、十分に理由のあることであった。

1．高野房太郎の日本労働組合運動への関わり

（1）労働組合結成への高野の挑戦

高野は1869（明治２）年、長崎市に生れた。父・仙吉は和服裁縫師であった。東大教授、大原社会問題研究所長、初期労働運動の良き理解者であった岩三郎は弟である。1877年、一家で上京、回漕店兼旅人宿を経営する。た

だ、不幸なことに、父がすぐに他界し、家も火災にあう。

母が旅人宿を引き継ぐが、房太郎は横浜の伯父の下で働きながら、行く末を考える。明治初期の日本における近代化の動きを敏感に受けとめ、興味をひかれる身近なところから挑戦しだす。横濱商業夜学校に学んだのも、その延長であった。

1886年、渡米し、出稼ぎ労働に従事する。いったん帰国、郷里長崎の山を処分して再渡米。アメリカの方が経済的成功・自立の機会が多いと考えたのであるが、労働に従事しつつ、勉学も続けた。同時に労働問題に関心を示しだす。職工義友会の結成も実現する。アメリカ労働総同盟（ＡＦＬ）会長のＳ．ゴンパースに接近、師事。その熱心さ、誠実さがかわれ、日本におけるＡＦＬのオルグに任命される。

1895年、アメリカ海軍の食堂勤務の水兵として、帰国。日清戦争直後の日本社会で出直すことになる。その中でいきなり目立つ動きが労働運動との関わりであった。

高野の労働運動への関わりは、たまたま自然発生的な争議に遭遇するなど、偶然や突然のきっかけやたんなる思いつきで始まったわけではなかった。経験や学習や考察の積み重ねによって形成された思想・信条に沿うものであった。労働者の団結を進める手順を踏んで計画的に取り組み、しかも実現に漕ぎ着ける。

まず、種蒔きとして労働者に労働組合の必要を訴える論説「日本における労働問題」(『読売新聞』1891年８月７日)、「労働者諸君に寄す」（片山潜『労働者之友喇叭撒の伝』所収、1897年）等を発表した。ついで1897年に実践の第一歩として職工義友会を再建、ついでそれを足場に労働組合結成を目指す準備団体あるいは連合組織である労働組合期成会を結成する。いきなり労働者の中に飛び込み、オルグ活動や団結に取り組んだわけではなかった。

その職工義友会時代に、労働者に団結の必要を訴える最初のビラ「職工諸君に寄す」をつくる。原稿を自分で書き、社会政策学会で知り合った秀英舎（現・大日本印刷）社長の佐久間貞一にその印刷を依頼する。佐久間はそれを引き受け、自分の会社で印刷をする。その結果、講演会で、また鉄工や印刷工等にこのビラがまかれ、組織が広まる土台づくりがなされる。

そのような構想・計画を手順通りにすすめ、成功させたのは、高野がアメリカでの体験や見聞・学習を基に、時代の動向・空気を敏感に読み取り、その流れに乗ることができたからであった。日清戦争後、工業化の進展、労働者の急増がみられ、しかも劣悪な労働諸条件の下での就労、暮らしが蔓延しだしていた。時代がまさに労働問題を地表に押し出そうとしていた時である。そのように労働問題・社会問題が拡大する動向を、彼は真正面から受けとめ、対応したのである。

（２）労働組合という用語を初めて実践に採用した高野の慧眼

ここで特に留意してよいのは、高野が一方でいきなり労働組合ではなく、準備団体として職工義友会、ついで労働組合期成会を組織したこと、他方でその名称に当時比較的多く見られた同業組合や職工組合ではなく、今日まで続く労働組合という用語を使用したことである。

まず労働組合期成会というクッションをおいたことで、高野は組織化に取り組むのに多少なりともゆとりを与えられ、かつ佐久間貞一、鈴木純一郎らインテリゲンチャの協力も得られることになった。また、労働組合期成会が登場するまでは、労働組合という用語は一般化どころか、まだほとんど知られていなかった。それなのにあえて労働組合の用語を使用したことが後に至って高野の評価をさらに高めることにもなっていく。

労働組合の用語は、1893年に、稲波鈞三郎が「労働政略」(『稲波鈞三郎遺稿』橋本夏男編・発行、1896年）において初めて使用している。それを労働運動の実践において使ったのは、このように高野が最初であった（小松隆二『日本労働組合論事始』論創社、2018年)。その期成会は、名称の通り、労働組合そのものではなく、労働組合の結成を目指したり、連絡役を果たしたりする団体である。そこに、明快に労働組合の用語を使用したのである。

ここにおいて、高野は労働組合の名称を実践的な労働団体に最初に使用した人として忘れられない位置につくことになった。

職工義友会と労働組合期成会の前にも、労働者による組織化や活動の動きはいくつか見られた。しかし、いずれも単発の動きで、計画的に、手順を踏んで恒常化を目指して取り組まれたものではなかった。それだけに、後世に活かされる種や芽となるものではなかった。

かくして、労働組合を理解し、その見通しも目的も明快に描いた上で、組織化に取り組

む源流は、高野、そしてその職工義友会とそれに続く労働組合期成会であったのである。

その際、留意すべきことは、高野はただ闇雲に組織化を進めればよいというのではなく、また急進社会党や共産党方式ではなく、「平和秩序の下に」「徳義的に」取り組むこと（上掲高野房太郎「労働者諸君に寄す」）、さらに組織のみでなく、その維持・展開に不可欠な機能の整備も忘れなかったことである。それは、労働者の団結をただ理念・観念で受けとめたのではなく、実践性と永続性が大切な大衆組織として受けとめた現れでもあった。団体交渉が認められない時代状況だけに、交渉による労働条件の改善が難しいので、機能として共済活動、労働組合の別働隊として協同組合の役割を重視したのも、その現れの一つである。

それらを総合すると、高野は労働組合運動の指導者、オルガナイザー、実践家、とりわけ堅実な労働組合主義者であったことがうかがえよう。

ただ、1900年８月には、それほど情熱と労力と知識を注ぎ込んだ労働組合と協同組合から、あっという間に身を引き、中国大陸に渡ってしまう。生活の不如意、労働組合も協同組合も思ったほど拡大も安定もしない現実、組合費の徴収の難しさ、それだけに労働組合には生活の依存ができない状況、片山ら社会主義的指導者との対立、官憲による弾圧の拡大、あきらめの良さと放浪癖等いろいろ理由が憶測されるが、高野が、労働組合と日本を離れた真の理由は特定できない。しかも、それからほどない1904年３月、青島のドイツ病院において肝臓膿腫で生涯を終える。享年35。惜しまれるほど短命の旅立ちであった。

２．高野房太郎の労働組合思想

高野は、アメリカでの生活・労働・学びの体験があったからこそ、労働者の団結や労働組合運動に関心をひかれ、心を動かされることになった。

明治10年代の後半から日清戦争にかけて、多くの日本の青年たちがアメリカに渡った。留学ではなく、アメリカに行けば、仕事にありつけ、日本の家族に仕送りもできるといった期待からの出稼ぎであった。つい先頃まで見られたアジア諸国から日本にやってきた出稼ぎ労働者にそっくりであった。

時には出稼ぎ、時には移住に近い渡航で、日本の若者たちは、その先でいろいろの体験を積んだ。出稼ぎのつもりであったが、渡航先で勉学に打ち込むものも出てくる。もっとも、留岡幸助のように最初から出稼ぎや労働目的では無く、監獄問題や感化問題の学習・研修が目的の例もあった。ただ、いずれも片道切符の貧乏渡航であったので、労働には就かねばならなかった。

高野も出稼ぎ労働者的就労と処遇に甘んじながら、向学心も強く、先や上を見る性格でもあったので、働きつつ、学校にも学び、関心を拡げていく。インテリゲンチャの素養・力量も培っていく。そのうち、労働問題に次第に大きな関心をひかれるようになり、労働者も、国民の一人として社会の重要な構成員であり、政治家、経営者、インテリゲンチャ等とも対等であると考える。その地位の向上によって、自らの労働・生活条件の改善のみか、より良い社会づくりにも寄与できるという思いを抱く。

しかるに、当時の日本における労働者の労働条件、生活水準、社会的地位は余りに低く、労働者の置かれた環境・現実は極めて劣悪で厳しかった。それを解決するには、一方で義務教育・普通教育の整備や浸透、加えて法的保護や公的保障などの拡充、他方で労働者自身の団結による下からの恒常的な要求・運動が不可欠であると考えるに至る。

ただ、労働者保護の法制、教育制度の整備等は不可欠であるとしても、時間も要するので、彼は、とりわけ労働者自身の団結と運動には並々ならぬ関心を示した。その際、学んだ労働組合と運動がアメリカ労働総同盟であったことから、決して過激な方法、「労働者の偽りの友」（「職工義友会の演説会の成功を伝える」1897年）や戦闘的な社会主義者に頼るのではなく、穏やかな労働組合主義に立った。その上で、単に言葉や文章で訴えるだけではなく、自らも実践にも乗り出すに至る。

ただ運動に際しては、自らの殻に閉じこもらず、可能な限り周囲につながりを求め、運動に活かすこともする。そのつながりの中に佐久間貞一、初期社会主義者たちも入っていた。特に佐久間には最大限の敬意を払うが、それに佐久間も応えてくれる。

もう一つ、高野が戦争否定の認識を抱いていたことも注意に値する（「通信の代金受領と協同組合の計画について」1896年）。それは、佐久間を尊敬し、受け入れたこと等と同様に、労働者の側に立つ視点、労働者にプラスになる視点を大切にしたことの結果でもあった。時代に合わせた本物の労働組合主義者であったことの証左ともいえよう。

3．労働界における高野房太郎の評価

以上を見れば、高野を「日本労働（組合）運動の父」と呼ぶことには何ら躊躇する必要がないことを教えられるであろう。黎明期日本の労働組合とその運動の最大の貢献者が高野であることは、多くの運動家・研究者が一致して認めるところでもある。

あわせて、佐久間貞一を「日本労働（組合）運動の慈父」と呼ぶことも同様であろう。佐久間こそ、高野が労働運動に取り組むに際し、最も信頼した人であった。目立ちだした警察の干渉も佐久間なら守ってくれると（「わが日本オルグから」1897年）、尊敬の念を隠さなかった。佐久間の逝去に際しては「われわれの敬愛する、そしてもっとも有力な支持者であった佐久間貞一氏が、宿痾の結核の再発により11月６日に死去されました。これはわれわれにとっては大打撃で」す（英文書簡「日本の工場法案」、1898年、『アメリカン・フェデレイショニスト』第５巻11号、1899年１月）と嘆き悲しんだことも思い出される。また片山潜と西川光次郎が今は古典の位置にある名著『日本の労働運動』（労働新聞社、1901年）において口絵の第一頁に「吾国労働界の先哲」と大きく掲げた肖像こそ、佐久間であったことも想起されるであろう。

このように、黎明期に堅実な労働組合主義を掲げ、かつ義務教育の浸透の必要もくり返し訴えるほど広い視野に立て、さらに労働組合期成会のような組合結成の母体となる準備会・連合体の必要を認識できて、同時にそれを実践・実現できた高野がいたことは、日本の労働運動の出発にとって実に幸運のことであった。

彼の思想・理念、そして指導力・実践力は、日本の黎明期における労働の世界にはかけがえのないものであった。彼は黎明期日本の労働運動の指導者・オルガナイザーの知識と力量、それに情熱を十分に備えていたからである。

それを育てたものは、上述のようにアメリカ合衆国における高野の生活と労働と学びであった。決して楽ではなかったが、アメリカン・ドリームの一端であれ、見聞した高野には可能性を信ずる向上心・上向志向は消えることがなかった。まず労働や事業に励み、あわせて夢と向学心を持ち続けたので、学校に通うなど学びも続けた。その学びの中にアメリカに堅実に育っていた労働組合運動も入っていた。その学びが、黎明期日本の労働運動に大きく活かされ、寄与するところとなったのである。

結び

高野は、日本における労働運動の黎明期に、まず労働者の団結の必要を訴えるところから始めた。ついでその実践にも関わり、さらに労働組合の結成にも成功した。また労働者を引きつける組合機能も重視し、労働組合をある程度恒常的に維持することにも成果をあげた。

かくして、労働運動の遅れた日本においても、労働組合の結成と活動は、明治期にもいったんは成功する。しかし如何に高野の優れた力量と情熱があったとしても、思ったほど長続きはしなかった。それでも、その後の大正以降の労働運動の再開と本格化を見通すと、高野は新世紀へ転換する直前の日清戦争後の社会に、労働運動を紹介し、実践・実現もはかった。それは、同時にやがて大正期以降になるが、日本に労働組合・労働運動を安定的に根付かせるために種を蒔く役割も演じていたのであった。

明治末の日露戦争前に、いったん労働運動は頓挫したものの、高野らの挑戦・苦闘があってこそ、大正期に至って鈴木文治らによる労働運動の再開、定着、さらに発展を見ることができた。それには高野の先駆的体験や挑戦、また理念や思想が活かされるからである。その意味で、高野は労働組合運動の黎明期の厳しい時代に労働組合の種を蒔いた人でもあった。僅か35歳という彼の短い生涯を考えると、その短さの何倍何十倍にも値する巨大な足跡・情熱を日本の労働運動に注ぎ、残したといえる。

大正以降に展開されるあらゆる労働運動流派の直接の源流は鈴木文治らの友愛会にあるが、高野と明治期の労働運動はそのまた先の源流に位置する。高野らが種を蒔き、芽を育てた先駆的挑戦・活動の賜物が大正期以降の労働運動の全面的展開であった。今日の労働組合とその運動にしても、高野の足跡と役割を忘れては語ることができないであろう。

＜参考文献＞
高野房太郎著　大島清・二村一夫編訳『明治日本労働通信　－労働組合の誕生－』岩波書店、1997年。今回の拙論における高野の論説・書簡の引用は全て同書からである。
二村一夫『労働は神聖なり、結合は勢力なり　－高野房太郎とその時代－』岩波書店、2013年
小松隆二『日本労働組合論事始』論創社、2018年